



新太平記(四)

山岡莊八

講談社



新太平記 (四) 湊川の巻

昭和四十七年三月二十日第一刷

著 者 山岡莊八

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二 郵便番号 一一二
電話東京〇三九四五一一二二 (大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定 価 五八〇円

©山岡莊八 昭和四十七年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

新
太
平
記

(四)

湊川の巻

装
幀

川
田

幹

征 東 将 軍

「北条がことは、さして案ずるには及びませぬ。相模次郎時行はまだ少年、鎌倉中の寺院に、髪をおろしてかくれてあつた北条氏の遺臣どもが、俄かに還俗して呼応は致しましたが、根は、ご新政に不平を持つて集つた烏合の衆にござりまする」

直義に説かれて、尊氏も、次第に、ぬきさしならなくなって、冷静に自分の立場を見つめはじめた。

（たしかにわしは狡かつた！ わしの欲しているのは謀叛人の名はかぶされず、そのまま天下を欲していたのだが……）

そのような利己は許されることではなかった。天下を取るといふことは、主上を裏切ることなしには成立しないことなのだ。

（天下を取るか、賊名を取るか……？）

それが尊氏に残された唯だひとつの選じ方だったのだ。

（そうなれば、わしは天下を取らねばならぬ……わしの心は、その方を多く望んでいる）
したがって、先ず天下を掌中におさめた上で、主上にその事実を認めさせるより他にない。さすれば、その時はじめて彼の賊名は消えるであろう。

「いま北条氏に味方する者の大半は……」

直義は熱心に言葉を続けた。

「北条氏への義理や恩義で動いて居るというよりも、ご新政に腹を立てて動いているのじゃ。それゆえ、われ等と兄者と肩を並べて鎌倉へ入ってゆけば、たちどころに大勢は決してゆこう」

「みな、寝返ると云うのじゃな」

「もともと、武家の世をなつかしんでの行動ゆえ、時行よりも、源氏の長者の兄者が強いとわかれば、誰が弱い者に味方して生命を賭けようとするものか」

「そうか。やはり強い者でなければならぬか」

「武士を押えるものは武士じゃ。強い力を持った源氏の棟梁じゃ！」

「しかし、北条方の人数は五万というからの」

「一夜にして半減もし、三分の一にもなる五万じゃ。聞けば、もはやここへも三万の軍勢が集りつつある由、これで充分勝利はこっちのものじゃ」

そこへ一色右馬之介があわただしく入って来て、

「京より勅使が到着なされました」

「なに勅使……」

こんどは直義よりも先に師直が舌打ちした。

「屋形！ 追い返されませ。何のいまごろになって勅使じゃ。また見透いた懐柔策に違いないの

じゃ」

「そうじゃ。逢う必要はない。もはや、兄者は先発されたと云うて追い返せ。矢矧川の先はもはや戦場、合戦の勝敗が決するまでは旅も叶わぬとそう申せ」

直義も、ここで尊氏に動揺されては一大事と、眉をあげて右馬之介を叱咤した。

しかし、その時にはもう尊氏は手をあげて直義と師直をさえぎっていた。

「待て……まあ待て」

「と云うと、兄者はお会いなさる気か」

「わしは……わしは、確に大悪人じゃ」

「そのようなことを訊いているのではない。ここで勅命を蒙ったら、いよいよ賊名はのがれぬ所と云うて居るのじゃ」

「まず待て。賊名はもう恐れぬ。恐れずに会おうと云うのじゃ。会って、それが味方の利になることとならば、こっちで利用してやろうと云うのじゃ。こなた達より、尊氏の方がずっと二重三重の悪人であろうが……」

尊氏はそう云ってから右馬之介をふり返って、

「参られたのは何誰どなたじゃ」

「はッ、頭中とうちゅう将具光卿しょうくわうけいにござりまする」

「よし、会おう。師直一人同席して舎弟はこの場をはずしていよ」

「したが、兄者……」

「まあよい。向うにどのような企みがあるかを知るにはこよない機会じゃ。悪人になりきろうぞ」

「その事ならば……」

と右馬之介は一膝すすめて、

「卿がわれ等にお洩らしなされました」

「なに、そなたに洩らしたと」

「はい。追い帰されてはならぬとの用心からでござりましょう。いや、おびただしい人馬に怖れをなしたのかも知れませぬ」

「申せ。その洩らしたことを」

「屋形を征東將軍に任ずる。それゆえ一刻も早よう鎌倉の賊を鎮定せよとの勅命の由にござりまする」

「なに、征東將軍……？」

「征東とは、東を征せよか」

師直と直義がいぶかしそうに視線を合せたとき、尊氏の笑いがはじけるようにあたりにひびいた。

「聞いたか兩人、征東將軍じゃとよ。ハハ……將軍……征東將軍……」

「そのような將軍がありましたか」

「あるものか。苦しまぎれの任命じゃ」

「では会うても無駄であろう兄者」

「いや、そうではない。わしはこの名を征夷將軍と受取ろう。どうじゃ、これで、わしの賊名はしばらく延びた。勅命を蒙って堂々と鎌倉に入れるのじゃ。將軍として入ってゆけるのじゃ」

「なるほど……」

「諸国の武士に、征東と征夷の区別などわかるものか。こりやおかしや！ ハッハッハ……到頭わ

しは届捨ての罪を消されて、堂々と鎌倉で將軍と称せるのじゃ。忘れまいぞ。よいか。頼朝公とおなじ仕事を大切な勅許を得て成し得る口実を掴んだのじゃ。ハッハッハ……さ、右馬之介。これへ勅使をご案内申せ。こりや、おかしや。ハッハッハ……」

尊氏にしては珍しい昂ぶり方であつた。

恐らく賊名を蒙らないうちに幕府を開けることになつたのが、嬉しくてたまらなかつたのに違ひない。

それにしても双方ともに信義をはなれた謀略と謀略の冷戦は、もはや完全に融和の道を閉して、次第に血の香を呼び出している……

大仏殿倒壊！

北条勢はまだ亀寿から元服して間もない高時の二男、相模次郎時行を頂^{いた}いて鎌倉に入るとすぐさま、以前の若宮大路の幕府あとに仮屋を構えて改めて関東から兵を募つた。

ここにも続々と応募の者がつめかけた。いづれもご新政以来報われなかつた土着の武士たちで、彼等は到着帳にその名を記すと、きびしい面持で呼出しの順を待った。

すでに鎌倉を落しているのだから再び武家の時代に戻つたのだ……と安堵したかつたのだが、まだ少年の時行に会つて来ると、云い合したように小首を傾げて不安がつた。

時行は決して愚かそうには見えなかつたが、荒くれた武士たちが、一も二もなく心服出来そうな頑強さには欠けていた。

傍に刑部少輔時興でもいたら、もっと彼等は安心したであらうが、頼りになりそうなのは、名越

式部大輔時基ぐらいで、あとはいかにも山育ちらしいたよりなさであった。

名越時兼の方はこの時再び北陸から京を突こうとして、加賀に出ていたのである。

「——どうじゃ、あれでやれそうかの」

「——いや、よく鎌倉を落せたものだと思つて居る。いったいあの年少の君を、誰が補佐してゆくのであろうか」

「——その事よ。落したと云うても、足利左馬頭は殆んど戦らしい戦はせずに出て行かれたのじゃ
そうな」

「——すると、何時か取つて返して、又取返す気であらうな」

「——云うまでもないことじゃ。必ず都から兄の武蔵守尊氏が援軍にやつて来る。それと合体して
引返すつもりに違いない」

「——それをべんべんとしてこの鎌倉で待つ気であらうか？」

「——そうではない。名越時基どのが総大将で、もう打つて出て迎え討つ気なのじゃ」

しかし、その人々も次第に集る人数が殖えて、街から谷が、数万の軍勢で埋めつくされてゆくのを
見ると、次第に不安を無くしていった。

群衆心理……と、云うよりもこれより他に世に出る機会はないのだと、無理にわが身を勇氣づけて
いる感じであった。

「——ご新政では滅茶々々じゃ。何しろ所領のあるじが三人出来ても裁けぬのじゃからの。このあ
たりで手柄を立てて、一所懸命の地だけは、わが手で確保しておかねば、子々孫々まで干ばしじゃ
わい」

「——その事よ、ここはお互いに苦情は云わず、若い君を助けて功を積むより他にあるまい」

そうした人々に最初進軍の命が下ったのは八月二日であった。

彼等は足利尊氏が、必ず京を発してやってくることを疑っていなかった。尊氏が京を発てば、直義は出会ったところで引返すに違いない。それを一步でも武蔵に遠い地で迎え討つのが得策だと考えた。

関東には平家も多いが源氏も多い。それだけに鎌倉へ近づけては、相手の人数もふくれあがると計算したのだが、その計算は正しかった。

二日の正午ごろに先ず先発隊は、長谷村から極楽寺の切通しを通って七里ヶ浜へうごき出した。総大将は名越式部大輔時基で、総勢三万余騎をひきいて東海、東山両道をひた押しに攻めのぼり、勝てばそのまま京をめざすのだと云った。

その日はからりと晴れていて、西にくっきりと富士がのぞまれた。

「——まことこれは幸先のよい出陣じゃ」

「——見よ。駿河の富士が手招いているようじゃ」

「——暑くもなし、寒くもない清々しい秋だから戦は楽じゃぞ」

三万の軍勢が当時の細い道を進んでゆくと、数十里の長さになる。鎌倉はここ当分するすると蜘蛛の糸を吐き出すように兵列を送り出してゆくであろう。

ところが、六日の昼近くになると、天候はがらりと変った。妙にねっとり暑く南の風が吹き出したと思うと、矢のような疾^{はや}さで雲が空を走り出した。

旧暦の八月始めなのだから、今の九月の台風期に入っているのだ。

「——こりゃ、おかしい風が吹き出したの」

「——心配するな。風は人や馬まで吹きとばしはせぬわ」

発進して二日目なのだから、ポツポツ大粒の雨が混り出しても今更行進は中止出来なかった。せいぜい濡れるをいとう位の気持で、さして気にする者もなく隊列は続いた。もう先頭は藤沢あたりを進んでいるかも知れない。

と、申の刻近くになって、ゴーッと無気味に海が鳴り出した。

「――あの音は何だ!? 津波かも知れないぞ」

「――あ、雨もやって来た。これはひどい! 篠つくとはこの事じゃ」

狂ったような烈風に煽られて、それはさながら滝に打たれるような豪雨であつた。

「――ワッ」と、人々は隊列を乱して、木の陰、軒の下に雨を避けた。と、その瞬間だった。メリメリッという音がして、軒が宙天に舞い、立木が悲鳴をあげて根こそぎになった。

空は黒髪をふり乱したように縞を描いている。

「――危いッ。空いっぱいに板や瓦がとんでいるぞ」

「――避ける。大仏殿の中に避ける」

場所が初瀬村の深沢（今の長谷）近くだったので、人々は先を争って大仏殿になだれ込んだ。

大仏殿は、暦仁二年三月に、遠江国の沙門浄光が建立した見上げるような大寺院で、中には、金銅の大仏（今の露仏）が安置されている。浄光が建立した当時は木造の大仏だったのだが、建長四年の八月に、北条氏の中でも名君とうたわれた執権時頼が、これを金銅に改鑄したものだ。

「――急いで入れ。ここならば安全じゃぞ」

「早く入って扉をしめよ」

まっ先に駆け込んだ軍兵は、はじめは声をからして叫んでいたが、ついには悲鳴をあげだした。幾ら大きいといっても、一寺院に収容出来る人数は知れたものだった。

五百人あまり入ると、もう中はいっぱいで身動きも出来なくなる。

「——もつと押せ。もつと片寄って入れて呉れ。海の鳴りようが尋常ではない。この分では……」

「——入れて呉れーえッ」

「——次々に屋根が飛んで外には……」

何れも語尾は暴風雨で吹き千切られて、あちこちと扉を閉めた堂の中はもうまっ暗な熱気であった。

「——こりゃ、いったいどうなるのだ」

「——こんなひどい風は前代未聞じゃ。急いで扉をしめたからよかったようなものの、さもないと中へ狂い込んで来る風で屋根を吹きとばされたかも知れぬ」

「——あ、外へは津波が来たらしいぞ」

中にいてもゴーッとはげしい地鳴りがして、ひと抱えもある柱が、静かに静かに揺れている。時々メリッと言がするのは、その揺らぎが決して小さくない証拠であった。

「——これは外では怪我人死人が出ているぞ」

「——山の中を歩いている者はどうしたかの」

「——これは、幸先のよい出陣ではなかったかも知れぬ。見よ、大仏さまが、びっしりと汗をかいて見てござるぞ」

「——案ずるな。われ等は後生がよいゆえ、こうして、大仏さまのお膝許に救われたのじゃ。浜手を歩いてきた者など、或いはごつそりと波に浚さらわれているかも知れぬ」

人の智慧というものは、いつも儚はかなく悲しいものだ。彼等はここが安全と信じ込んだ瞬間に、もう小さな利己心をむき出しにしてわが身の仕合せだけを囁き交している。

中には、耳を澄まして風音を聞いているのが恐ろしいので、必要以上に多弁になっている者さえあった。

「——この分では、このまま夜になって、今夜中は続きそうだの」

「——案ずるなと云うに。どうなったとてみ仏と一緒に宿じゃ」

「——馬どもは大丈夫かの」

「——馬じゃとて大丈夫とは行くまい。しかし、馬を聖舎には引き入れられまいが」

「——とは云うが、奥州から売りに来たのを苦心して手に入れた逸物^{いっちゅうぶつ}じゃ。二度とは買えまい」

「——考えようじゃ。馬だけが生きていて、乗り手のこなたが死んだのでは話になるまい」

五百人の私語は大きい。この私語がなかったら、彼等は、古い堂宇のきしみにもっと早く気がつく筈であった。

メリッ、メリッ、メリメリッと、五百人の頭上で、古い棟梁^{むなばり}は暴風雨と格闘している。

ゴーツとまた宙が鳴った。と、思ったときにはもはや大きな柱は棟梁との組み手はずして、リメリッと右翼を折った。

「ひゃッ！」

と悲鳴が湧きあがった。が、どの扉も閉っているで誰一人遁げ出し得る者はない。悲鳴の上へ巨大な梁が、柱が、天井が雨よりしげく落下した。ギャッとそのまま魂^{たまご}消る声。

「——助けてえッ」

と、おしつぶされてもがく声。

あたりは一瞬にして修羅場に変った。その上へ横なぐりの雨と風。

金銅仏の肩からはね返って、唸りを生じた巨材の暴威。やがて力の均衡^{きんこう}を失って、建物自身がぐ

らつと右へ傾くと見るや、巨獸の咆哮に似たひびきを立て、五百人の生靈を一度に呑んで這いつくばった……

悲情の介錯

発進のはじめから、大仏殿で五百余人の圧死者を出した北条勢の士気はあがらなかった。

場所が大仏殿であり、おびただしい軍勢が廬遮那仏の膝許で、見るもむざんに押し潰されて死んだという事実が、二重三重に彼等の門出を暗くした。

しかも、その廬遮那仏を建立したのは、鎌倉幕府中興の名君といわれた、信仰厚い執権時頼入道なのである。

「——これは最明寺入道の御霊が、無謀をやめよと警告されたのではあるまいかの」

「——そんなことは迷信じゃ。入道さまとて、わが血筋を世に出したい道理であらうが」

「——それにしても五百余人が、一人残らず死ぬというのはどうしたことじゃ」

「——扉が開かれただけのことよ。あの暴風雨だから扉を閉めておく。棟梁が折れた。建物がゆがむ。ゆがんでしまえばこんどは開けようとしたとて開かぬ……何の不思議もないではないか」

しかし、そう説く方も、始めの意気込みは無くしている。

まだ年少の時行と、屈強な、働きざかりの足利兄弟との比較だけで、もともと心細さはあったのだ。そこへこうした不吉な椿事がわき起ったのだから、士気をくじかれ、第一の遭遇戦で、これではどうにも勝ちようはなかった。

北条勢が遠江の小夜の中山を越え、浜名湖と遠州灘の間にある洲崎へかかった黒木橋の橋本まで

すすんだところで、兩軍は矢合せを始めた。

尊氏兄弟は、これを迎え撃つのに柔軟をきわめた戦法をとった。進むと見せては退き、退くと見せては進んで、このあたりの戦だけで三十余度、駆けては引いた。

何れも相手の士気を計算に入れて、降る者に降る機会を与えるための駆けひきなのである。

北条勢はついに支えかねて、箱根の水飲峠まで一気に退った。

ここはこの山第一の難所なので、ここならば足利勢もそう容易くは攻められまいと思ったのだが、赤松筑前守貞範が、遮二無二攻め寄せてここもまた破られた。

しかも北条勢のしんがりをつとめた清久山城守は、切腹する間も見出し得ずに捕虜になった。

こうなると、いよいよ足利勢は勢いづく。

赤松貞範をはじめ、佐々木道誉、高師直、長井、仁木、細川などの諸勢が、功を競って追いつくる。

戦場は、水飲峠から大崩、相模川の岸、腰越、十間坂と、次第に鎌倉に近くなり、その都度北条勢の数は減って、鎌倉へ遁れ入った時には三万余騎の大軍が、ようやく三百あるかなしかの惨めさであった。

討死した者もむろんあったが、その多くは足利勢に降服して、逆に敵の数をふやしてしまっていたのだ……

八月十八日の暮れ方だった。

相模川まで出向いて戦い敗れて戻って来た北条時行を迎える、通称大御堂と呼ばれている勝長寿院の大庭には、時行をより育てた諏訪三河守を囲むようにして、鎧に矢を立てた三浦介入道、同若狭五郎、那和左近大夫、工藤四郎左衛門など、生き残った重立った大小名が四十三人、おりからの